

「自立とはなにか？」と問われて、今「自分らしく生きること」と答えたとしましよう。このような「自立」定義は、辞書的な「自分の生活費は全て自分で稼いで」とか「誰にも迷惑をかけないで社会的なルールを守って」というような事柄には重きを置いていません。なぜなら、そのようなことに重きを置いてしまうと、重度の知的障がいの方々には、一生かかっても「自立」というものがないということになってしまうからです。定型発達の人々が結果として「自立」をしているように見えるのは、そのプロセスの中に「自己決定」つまり「自分の人生は自分で決める」という積み重ねがあるからなのですが、そこに重きを置けば、重度の知的障がいの方々であっても必ずや「自立」ができるということになります。

このようなことを踏まえて「自立」を定義し直すと、「自立とは、自分の人生は自分で決めながら、できないことは助けられて、自分らしく生きること」となります。

では、その自己決定、つまり自分の人生は自分でつかみ取るという姿は、どのような時に促進されるのでしょうか？

「今日は、塩ラーメンが食べたい」「今晩は遅くまで起きていたい」「新発売のスマホを買いたい」…、人生は、些細な自己決定によって彩られています。

「自己決定」とは言っても、その多くは実は「共同決定」です。幼児であれば、親の承認や応援は必須です。小学生であっても5、6年生にもなれば、親や家族の承認や応援をどのようにして手に入れればいいのか努力するようになるでしょう。思春期ともなれば、共同決定と言っても、いやいや親の主張を受け入れるといった状況の中での自己決定が続くと思われま

す。ところが、大学生になって田舎から都会に出て行ってアパートで一人暮らしをするという状況で、どのように自己決定は促進されるのでしょうか？

このような暮らしは、辞書的には全くの自立とは言えません。財政的な支援は親から相当受けていますし、あちらこちらに大

きな迷惑をかけながら生きているからです。それにもかかわらず、自己決定は進みます。先ほどの例でいうならば、「塩ラーメン」を止める人も「遅くまで起きていたい」を止める人も近くにはいません。「新発売のスマホ」だって少々の仕送りのやりくりをすれば、こっそり手に入れることだってできるでしょう。

そうです。「親元から離れる」ことが自己決定、すなわち「自立」の促進につながっているのです。また、この「進学」という社会的に許容されている事態そのものが、心理的には、「親元から離れる」＝「家出」という状況を生み出しているのです。「家出」の持つ心理的な意味合いを「進学」が持ち合わせることで「ていのいい家出」を作り出すことができるのです。

すると、結婚なんていうのも同じような意味合いにおいて「ていのいい家出」と考えることができます。いつまでも親との共同決定をしなくてもいい状況、これが「自立」を促進させるということになります。

一方、重度の知的障がいの方々にとっては、この「親元を離れる」＝「心理的な家出」は、自由意思によってはなかなか難しい。誰かのお世話が絶対必要であるから、親元が嫌だからと言って、ノコノコと勝手に家出することができないわけです。もちろんその力もない。また、親の方も「私がついていなければ」と考えるのは当たり前ですから、なかなか離すことが難しい。

そこで、入所施設。これがなかなかの「ていのいい家出」の場所なのです。基本的には、24時間、365日ケアの場所ですから、十分な支援を受けながら「親元から離れる」生活ができるわけです。大きな金額の購入物を除けば、その共同決定の多くは、支援職員との間でなされ、親は介在しません。「こっそりやっちゃえ」なんていう秘密も生じさせることもできます。親元には親への遠慮という形でなかなか伝えることができなかった多くの要求を職員との関係の中では自信をもって伝えることができるようになります。「かわいい子には旅をさせよ」の真実がここにはあります。